

巻頭言



徳島大学薬学部長

土屋浩一郎

Tsuchiya Koichiro

➡ の原稿を書いている時点では
➡ 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のオミクロン株による感染も下火となりつつあり、巷ではコロナ後に向けた動きも活発になってきています。

さて歴史を振り返ると、人々の行動様式は「自然災害」「戦争」「パンデミック」「世界恐慌」に遭遇してそれらを克服するとともに大きく変化し進歩すると言われてきました。

これを当てはめると、11年前の東日本大震災では従来の「防災」という考え方から「減災」という災害時の被害を最小化する考え方にシフトしたことと、また「想定外」という表現に批判が集まり、楽観的な予測よりも悲観的な想定に重きを置ききっかけになりました（「内閣府防災情報のページ」より抜粋）。「戦争」では、戦争を通じ人々の暮らしや人生が大きく変わることは言を俟ちません。グローバル化が進んだ現代では「世界経済」に与える影響も甚大です。

そして2020年に新型コロナウイルス感染症が「パンデミック」と認定され、非常事態宣言、大学等での行事の自粛、

マスク不足、医療崩壊に関する報道、3密回避など、それまでの日々の生活が大きく変容することを経験してきました。

すなわち、ここ最近では行動様式を見直す状況が矢継ぎ早に起きてきた時代といえます。それとともに新しい3つの動きがクローズアップされてきました。

1つめは、「SDGs（持続可能な開発目標）」です。SDGs自身は2015年の国連サミットによって採択された考えなのでコロナ禍以前から始まっていたのですが、コロナ禍のここ数年、身近なところでは「フードバンクの設置」、「男女共同参画の推進」「働き方改革」「レジ袋有料化」「気候変動対策」などとして目に触れる機会が増えています。

2つめは、次のデジタル技術の加速と関連しますが、「集中」から「分散」、「一極化」から「多極化」への動きが強まりました。

3つめはデジタル技術を活用するDX（デジタルトランスフォーメーション）の飛躍的進歩に伴う社会環境の急激な変化が挙げられます。キャッシュレス決済は日常の風景になり、それまで遅々として進んでこなかったリモートワーク、大学では遠隔授業が一気に浸透しましたし、学会もハイブリット開催やウェビナーを用いた講演会の実施、またコロナ禍の少し前（2019年度）から始まっていたBYOD（Bring Your Own Device）で、授業等に個人所有のデバイスを持ち込む風景も一般化しました。そして薬学分野においても医療ビッグデータやオミクスデータを活用した新薬や新規治療法の開発のほか、薬剤師業務においても遠隔（オンライン）服薬指導が始まり、また電子処方箋も今年度中に導入されることが決まっています。

これらのように、数年前までは「でき

れば良いね」と話していたことがここ数年で大きく進んだことに驚かされますし、これまで漫然と行ってきた事の見直しにもつながりました。

それと同時に、人と人との結びつき、コミュニケーションの大切さが再認識された時でもあったと思います。エッセンシャルワーカーという言葉により、様々な人によって社会が維持されていることを改めて実感しましたし、マスク不足の事例から日用品がどうやって我々のところに届けられているかを知ることができました。遠隔授業や教職員が参加する学内外の会議においても、遠隔で実施することにより時間と場所の自由度が大幅に増加した一方で、対面による授業や研究活動、そして課外活動のような対人の直接の交わりによってでしか得られない経験など、対面が明らかに優れている事柄も明らかとなり、リアルとバーチャルの長所短所を理解する機会となりました。

冒頭に記載したようにアフターコロナが話題になってきていますが、今から約100年前のインフルエンザによるパンデミック（スペインかぜ）で世界人口の20-30%が罹患し世界で4,000万人が他界されたことから（WHO）、その最中の人々の意識は今同様非常に高いものでしたが、収束とともにその関心は急速に失われたそうです（JAMA, 85, 520, 1925）。

このことを教訓として、コロナ禍というトンネルを出た後に広がる世界では、私たちはこのコロナ禍で得た経験を過去のものとして、3つの視点（持続可能な開発目標・分散と多極化・DX）をもって時代を切り開き、未来に繋ぐ必要があると考えています。

薬学科長・先導的薬剤師育成コース長より



薬学科長
先導的薬剤師育成コース長

石田 竜弘

Ishida Tatsuhiro

先導的薬剤師育成コース長（薬学科長）の石田竜弘です。令和3年度入学生より「薬剤師資格を基盤とする薬学部新6年制課程」に移行し、薬学部の理念である「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」の養成を強力に推し進めています。高度な研究や先端的な治療法がわかり、リーダーとして活躍できる薬剤師の輩出を目指し設置されたのが「先導的薬剤師育成コース（定員50名）」です。このコースは、研究実践能力を備えた薬剤師として先進医療分野に創造的な取組ができる人材の育成を目指した「研究型高度医療薬剤師育成プログラム（定員40名）」と、研究実践能力を

備えた薬剤師として地域医療分野に創造的な取組ができる人材の育成を目指した「研究型地域医療薬剤師育成プログラム（定員10名（学校推薦型選抜Ⅱ合格者5名含む）」の2つのプログラムからなっています。学校推薦型選抜Ⅱで入学した5名はプログラムが確定していますが、残りの45名は3年生進級時にコース決定を行います。第1期生である2年生は、これからコースおよびプログラムを選択することになります。薬学部では3年次進級時の選択に役立つ多彩かつ特徴的な講義や実習を用意していますので、1、2年生は主体的に取り組み、今後の進路を選択していただください。

創製薬科学科長・創製薬科学研究者育成コース長より



創製薬科学科長
創製薬科学研究者育成コース長

小暮健太郎

Kogure Kentaro

創製薬科学研究者育成コース長の小暮健太郎です。徳島大学薬学部の使命である創薬研究者の育成のために創設されたのが、創製薬科学研究者育成コースです。このコースは、「医療を理解し、創薬・製薬に貢献できる薬学研究者・教育者を育成する」ことを目的としています。創製薬科学研究者育成コースは、創薬研究者育成のためにコース独自のユニークな科目を設けており、3年生進級時に研究室配属されてから5年生後期まで卒業研究に打ち込むことが可能です。共用試験（OSCE/CBT）は、5年生後期に受験し、6年生で学外実務実習を実施することになります。そのため、

先導的薬剤師育成コースよりも、より長い期間研究を継続して実施することができます。さらに、より長く研究に打ち込める PhD-Pharmacist プログラム（こころざしプログラム）を設けました。このプログラムは学部4年終了後に、大学院博士課程（4年）に進学して研究力を身につけ、博士（薬学）の学位を所得後、学部5年次に戻り、薬剤師免許の取得を目指す特別選抜プログラムです。新入生は、2年後にコース・プログラムを選択することになりますが、1・2年生の間に様々な経験を積み多くの知識を得ること、なりたい自分を見つけてください。

Ph.D.-Pharmacist プログラム～こころざしプログラム～の紹介



医薬品情報学分野 教授

佐藤 陽一

Sato Youichi

学務委員長の佐藤陽一です。Ph.D.-Pharmacist プログラムとは創製薬科学研究者育成コースを選択した学生が、学部4年次終了後に大学院薬学研究所博士課程（4年制）に進学して研究力を身につけ、博士（薬学）の学位を取得後、学部5年次に戻り薬剤師免許の取得を目指す特別選抜プログラムです。早期段階で研究能力を洗練させ、博士号取得後に、実務実習・国家試験を経て薬剤師資格の取得が可能です。大学や公的研究機関、製薬企業等における研究者や病院薬剤師部等での臨床研究者として、学部卒業と同時に第一線で活躍し、次代のリー

ダーとして薬学研究を牽引できる卓越した人材の育成を目指します。本プログラムは、本学の理念である「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」と、徳島大学薬学部開学の祖であり日本の薬学の父と言われる長井長義博士が、若き日に“こころざし”を抱いて徳島の地から世界に羽ばたいた史実をもとに「こころざし（KOKOROZASHI）プログラム」と名付けました。本プログラムは令和7年度よりスタートします。是非、Ph.D.-Pharmacist プログラムへの進学をご検討ください。

研究紹介

■ 30年ぶりのリバイバル研究、インスリンできた？



機能分子合成薬学分野 教授

大高 章

Otaka Akira

実験を通して「ふしぎ」を見つけ、背後に隠れる「事象」を類推、実証実験から類推を検証、そして「事象」を応用展開へ、これが私の研究スタイルです。一例として、大学院時に手掛けたものの失敗、折に触れその理由を「ふしぎ」だと思い続けた研究のリバイバルを紹介します。これからの皆さんの研究活動の参考にしていただければ幸いです。

「S-保護システイン (Cys) スルホキシド**1** を用いジスルフィド結合を

作る」大学院時見つけた反応で、これを利用して複数のジスフィドを含むインスリンの合成に挑戦しました。結果は、前述通り失敗の山、分かったことは「どうやら Cys スルホキシド**1** は種々のアミノ酸側鎖と反応する」、反応の実態は不明のまま、約30年が経過しました。コロナ禍で研究活動がままならない時、学生とのディスカッションで、経口吸収されるキノコ毒ペプチドが話題に、トリプトファン (Trp) インドール環に Cys チオール基がチオエーテル結合したトリプタチオニン構造**2** を特徴とします。思い続けた「ふしぎ」があったので、この特徴的構造は Cys スルホキシドを利用して合成できると直感、学生にもつづやきました。

暫くして、つづやきを実行した学生から「Cys スルホキシドを利用してトリプタチオニンが合成できる」と報告がありました。反応条件は私の予想と異なり、塩素アニオン種の存在が不可欠です。塩素アニオン必要性の発見、偶然の産物ですが、本研究のリバイバ

ルに決定的重要事項となりました。また、反応条件を変えると Trp でなくチロシン (Tyr) のフェノール環との間でのチオエーテル結合形成が可能です。Trp および Tyr 選択性は、それぞれ軌道支配および電荷支配の反応の結果であることも分かりました。S-保護 Cys スルホキシドの保護基、スルホキシド活性化のための酸、そして添加剤を適切に選択することで、酸活性化 S-保護 Cys スルホキシド**3** と S-クロロシステイン**4** の作り分けが可能で、前者は Tyr と後者は Trp と選択的に反応します。さらに**4**は Cys 誘導体とも反応し、ジスルフィド結合を与えます。マルチタレントな S-保護 Cys スルホキシド**1** の能力を、30年前には引き出せず、失敗の山を築いていたのです。失敗の「ふしぎ」に隠れた「事象」の一端が暴かれました。

現在、これをもとに、インスリン合成に再挑戦中です。また、チオエーテル結合形成反応をタンパク質の修飾反応にも展開中です。さらにチオエーテル化 Tyr はフェノールフェノール

カップリング反応を起こすことを見出し、酸化修飾タンパク質の新合成法としての展開を探っています。パーキンソン病患者の脳内レビー小体に見出される α -シヌクレイン酸化修飾体が合成ターゲットです。そして本原稿の校正段階で、インスリンが合成できたかも？、の結果ができました。

科学研究の根は、「ふしぎ」を解明したいという動機にあります。「ふしぎ」を根気よく追及すれば、必ず科学的な果実が得られます、皆さんの益々の活躍を期待しています。

インスリン合成失敗から Trp, Tyr, Cys 選択的反應への展開

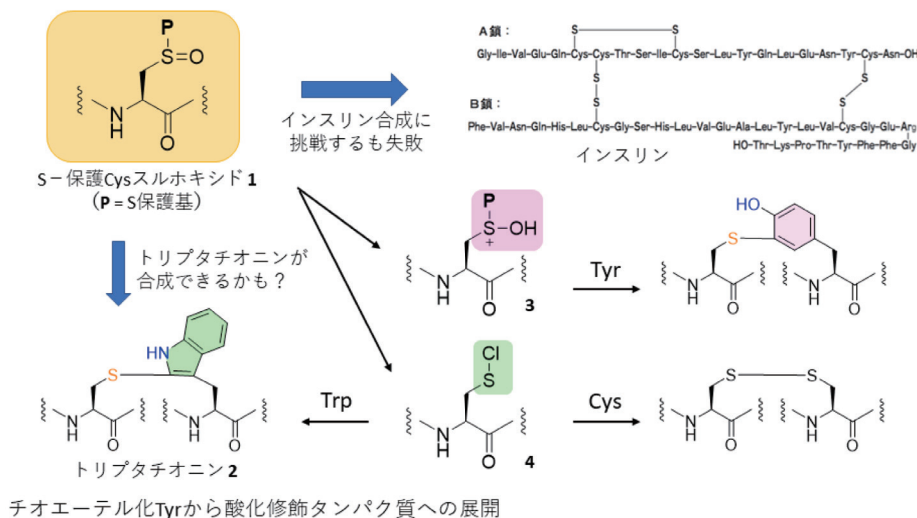


図 リバイバル研究の概要

国際交流

東國大学校薬学大学の開校10周年記念シンポジウム



医薬品病態生化学分野 助教

片山 将一

Katayama Shoichi

東 國大学校薬学大学 (College of Pharmacy, Dongguk University) と本学部は、平成24年より部局間学術交流協定を締結しており、活発に学術交流を行って参りました。また、平

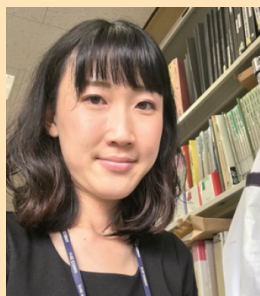
成31年には大学間学術交流協定が締結され、今後益々活発な学術交流が行われると期待されています。

本年度は東國大学校薬学大学の開校10周年を記念し、令和3年12月13日に開催された記念シンポジウム「Current Topics in Basic and Translational Research for Development of Innovative Drugs」に難波教授、清水特任助教と共に参加させていただきました。シンポジウムにおいて、難波教授は「Total synthesis of Palau'amine」、清水特任助教は「Evaluation of immunogenicity of nucleic acid-loaded PEGylated nanoparticles」、私片山は「Establishment a straightforward method for detecting catalytic activity of

CDKL5 using phos-tag SDS-PAGE」という演題にて発表を行いました。本来であれば現地を訪問し、東國大学校の先生方と交流を深めたいところでしたが、コロナ禍における状況を鑑みてオンライン参加となりました。当日は最新の研究、教育に関する講演を拝聴し、大変刺激を受けるとともに、私自身は研究能力および英語発表能力を向上すべき必要性について痛感いたしました。今回の経験を活かし、今後より一層の自己研鑽に励んで参りたいと思っております。

最後になりますが、このような大変貴重な機会を与えてくださいました土屋学部長と、東國大学校 Sang Geon Kim 学部長やご関係の先生方に深く御礼申し上げます。

iTEXシンポジウム (薬学部若手教員発表会)



生物有機化学分野 准教授

田良島 典子

Tarashima Noriko

薬 学部では、2014年度より、文部科学省概算要求事業の一環として、「多機能性人工エキソソーム (iTex) 医薬品実践化を通し操薬人育成事業」を推進しています。本事業は、薬を操る (DDS) 研究を通して薬物療法にイノベーションをもたらすような人材の育成を目的としています。

例年、1年間の総まとめとしてシンポジウムを開催しており、本年度は、2件の特別講演ならびに薬学部の若手教員7名 (今西、大園、片山、佐藤亮、清水、山本、田良島) による発表を企画しました (2022年2月3日 ハイブリッド開催)。特別講演1では、大

鵬薬品工業株式会社・CMC本部 馬場一彦先生より、製薬会社での研究開発や承認申請に関するサイエンスについてご講演頂きました。また、特別講演2では、令和3年度日本薬学会薬学会賞を受賞された大高章教授より、受賞題目である「自然に学ぶペプチド・タンパク質化学の開拓」研究のお話に加え、「ふしぎ」を求めて研究に取り組む姿勢について、薬学部学生ならびに我々若手教員へ向けて叱咤激励のお言葉を頂きました。7名の若手教員は、自身の研究成果に加え、これまでの留学やライブイベントを含めたキャリアパスについても紹介を行いました。後日、シンポジウムに参加した学生に感想を伺ったところ、「研究を楽しそうだと感じた」、「研究室配属までに自分の好きなことを見つけていきたい」、「将来を目指すモチベーションを得ることができた」、「若手教員はとて楽しそうに研究に取り組んでいると感じた」といった

非常にポジティブなコメントを受けました。私自身も発表者の一人として、iTEXプログラム (研究活動) を通して、学生の皆さんと共に成長を続けたいとの思いを新たにすることができました。

残念ながら、コロナ禍の影響によりハイブリッド開催となったものの、総勢150名を超える参加者からの積極的な質問が飛び交い、活気溢れるシンポジウムとなりました。本会開催にあたりご尽力下さった皆様、に心より感謝申し上げます。

iTex事業の詳細や得られた成果 (学生の活躍) については薬学部HP (<https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/faculty/labo/mar/iTEX/>) にも掲載しております。是非、ご覧頂ければ幸いです。



講演者の皆さんを交えて

新任教員挨拶



有機合成薬学分野 助教

佐藤 亮太

Sato Ryota

令和3年11月1日付けで、有機合成薬学分野（難波康祐教授）の助教として着任致しました佐藤亮太と申します。私は平成26年に慶應義塾大学理工学部を卒業後、同大学大学院理工学研究科に進学し、博士後期課程からは本学大学院薬科学教育部に院転しました。博士（薬科学）の学位取得後は米国サンディエゴにあるスクリプス研究所にて約二年間、博士研究員として勤めて参りました。この度、ご縁がありまして母校である本学に着任させて頂くことになり、大きな喜びと責任を感じております。

私の専門分野は有機化合物の合成です。私たちの身の周りには薬から有機

ELに至るまで様々な有機化合物で溢れており、その殆どが化学合成によって生み出され、社会に大きな影響を与えています。私はこれまで培った化学合成力を活かし、革新的な分子の創製や合成手法の開発を行うことで、社会の抱える様々な問題に対して有機合成的な解決策を提供したいと考えています。

また昨今のコロナ状況により様々な活動が制限される中、学生が研究や授業を通じて様々なことを学び、充実した大学生活を過ごせるように教育面でも尽力していく所存です。

今後とも皆様のご指導ご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

退任教員挨拶



薬物治療学分野 教授

滝口 祥令

Takiguchi Yoshiharu

私が徳島大学に赴任したのは、1995年阪神淡路大震災から半年後の夏。翌年に全国に先駆けて開設を目指した大学院医療薬学専攻（博士課程）の設置準備を兼ねてのことです。長井長義先生に始まる伝統を受け継ぐ創薬研究一筋の徳島大学に、専門性を備えた薬剤師養成を目的とした医療薬学を立ち上げる役割を受けて着任してから27年、今年3月末をもって、無事定年退職を迎えることができました。この間、国立大学法人化や薬学教育6年制導入、薬系大学新設ラッシュなど、大学および薬学を取り巻く状況は大きく変化し、それに対応すべく徳

島大学薬学部も組織改革や入試や教育の制度改革を重ねてきましたが、そんな改革の嵐が吹き続いた中で、多くの先生方の御協力を得て、医療薬学はしっかりと根付いてきました。これから更にどの様に進化していくのか、その成長を楽しみにしています。

在職期間を振り返って思うことは、自らも共に成長した共育者であったということです。多くの方との出会い、多くの経験が私を成長させて頂いたことに、感謝申し上げます。

最後に、皆様の益々のご活躍と徳島大学薬学部の更なる飛躍を祈念して、退職の挨拶とさせていただきます。



生薬学分野 教授

柏田 良樹

Kashiwada Yoshiki

母校である徳島大学薬学部 生薬学分野の助教授として着任したのが2006年でしたが、本年3月末で無事定年退職を迎えることになりました。私は、本学の修士課程を修了後、九州大学大学院薬学研究科博士後期課程に進学し、1984年から同大学薬学部の助手となり、教育研究に関わることになりました。その後、1989年9月から米国ノースカロライナ大薬学部で約5年半、1995年から新潟薬科大学の助教授で11年間在籍し、徳島大学に着任したのは、修士課程を修了してから四半世紀も経ってからのでしたが、母校で教育研究に関われた16年間は、自身にとって貴重な期間でし

た。所属したそれぞれの大学では、大学の恩師やその関係の先生方にお世話になったことは何かのご縁だと感じます。多くの同僚や学生さんと一緒に歩んで来ることができたことで、無事に定年を迎えられたと感じており、皆様に感謝を申し上げます。

徳島大学に着任したのは、薬学教育6年制が開始された年でした。それから十数年経過し、薬学系の人材養成の在り方についても検討が行われています。徳島大学薬学部も6年制1学科となり、薬学をリードする人材を排出する薬学部として益々発展していくことを祈念しております。

令和3年度薬学部・薬科学教育部各賞授賞式の開催について

令和4年3月23日、薬学部長井記念ホールにて、「令和3年度薬学部・薬科学教育部各賞授賞式」が執り行われました。今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため人数制限などの対策を行っての開催となりました。

授与式では、土屋学部長から、「時間は全ての人に平等で1日24時間です。この与えられた時間をいかに使って、結果を出していくかは一人一人に委ねられています。時間の使い方を意識して、目指す結果をつかんでもらいたいと思います。…また、いつの日にか、今日卒業した仲間と同窓会で再会する時を楽しみに、

社会の中で素晴らしい仕事をしていただきたいと、切に願っています。」とお祝いの言葉が述べられました。

続いて、卒業成績優秀者へ「長井長義賞」が、日本薬学会中国四国支部から、同学会での研究発表内容の優秀な学生へ

「学生発表奨励賞」が、教育・研究・社会貢献・課外活動において顕著な功績をあげた学生へ「学部長特別表彰」および「学部長表彰」がそれぞれ授与されました。(各受賞者氏名はP8に記載)



学部長表彰について

創薬理論化学 教授

立川 正憲

Tachikawa Masanori

本学部の教育・研究において顕著な功績があった者として、令和4年2月3日に大鵬薬品工業株式会社の馬場一彦氏が、薬学部長表彰を受けられました。同日開催の徳島大学薬学部「操薬シンポジウム」(『インタラクティブ YAKUGAKUJIN』講演会)において、土屋浩一郎学部長から、表彰状とメダルが授与されました(写真)。馬場一彦氏は、平成22年4月から11年間にわたり、大

学院薬科学教育部(薬物応答制御学分野)の客員教授、ならびに大学院非常勤講師(薬剤動態制御学特論)を務められました。この間、大鵬薬品工業と大学院薬学研究科との学術協定の継続的締結に対する馬場氏のご尽力により、未来にむけた産学連携の基盤を一層強化することができました。さらに、大鵬薬品工業 CMC 本部へのインターンシップの受け入れ体制を構築して頂き、「多機能性人工エキソソーム (iTEX) 医薬品化実践を通じた操薬人育成事業」を中心とした、教育研究に多大なる貢献をされました。これに加え、大塚ホールディングス3社の製剤研究所を取りまとめ、学生を対象とした

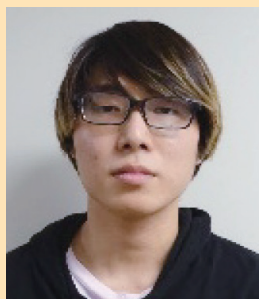


土屋学部長(左)と馬場一彦氏(右)

業務説明会を開催されるなど、キャリアパス教育にもご尽力頂きました。馬場先生の、本学部・大学院の教育研究活動に対する熱意と多大なるご功績に対し、心から敬意を表しますとともに、今後益々のご活躍を祈念致します。御受賞誠に、おめでとうございます。

学生の活躍

語学マイレージ・プログラムにかかる成績優秀者表彰(学長表彰)を受賞して



有機合成薬学分野 博士課程1年

大岡 巧太郎

Ooka Kotaro

この度、徳島大学の新たな取り組みとして、学部教育において学生に一定水準以上の語学力、コミュニケーション力及び自己主導型学修力を身に付けさせるために、2018年度入学者以降を対象として開始された、語学マイレージ・プログラムにおいて学長表彰をいただくことができました。平成中盤以降、多くの日本人(企業)は国内だけではなく海外にも注目するようになり、共通言語である英語のみならず様々な言語を身に着けることが重要視され始めました。多言語の学習において、自身の好むまたは得意とする内容以外で学ぶということは大変困難であり、自発的においてはほ

ぼ不可能であると考えられます。私自身、外国などには興味は全くなく英語を学びたいという気持ちになることはありませんでした。しかしながら、好きな読書において読みたいものをその言語で読むことが一番楽しめるということに気づいてから、元言語で読書をするようになり、苦痛なく英語を覚えていくことができました。これから学部生として英語を覚えていく方々も、流行りのYouTubeやTikTokなど自身が気楽に入り込め、日常に組み込めるプラットフォームで無理なく身に着けていかれることを心より応援しております。

学生の活躍

■ 光と医療を融合した医光分野への挑戦



創薬生命工学分野 博士後期課程2年
2021年度ひかりスカラー

桐山 慧

Kiriya Kei

講義が終わった帰り途。夕間に染まる常三島キャンパスの道や時計を、青色LEDの明かりが優しく彩っている——学部時代に見たこの美しさを、博士課程に進んだ今も鮮明に覚えています。しかし光は工学関係の専門分野であり、蔵本キャンパスではあまり触れることのない分野だと考えていました。事実、光の利用は蛍光タンパク質の検出やUVランプの使用といった限られた用途のみであり、私の研究分野において光とはその程度の存在でした。その認識を変えたきっかけが、2021年から始動した徳島大学ひかりフェローシップです。

本事業は徳島大学の誇る光技術を医療にも応用する、医光融合の発展を目的に

掲げています。光に関して一般的な知識しかなかった私ですが、本事業を機に改めて光とは何だろう？光を積極的に利用した研究とは…？と、今まで身近にありながらも深く触れてこなかった光について学びたいと強く感じ、様々な文献を漁り独学で勉強しました。伊藤孝司教授のお力添えもあり無事採用に至り、現在は他の採択者と意見交換することでさらに見聞を広めることができています。光に少しでも興味がある方は、本事業を活用してみても如何でしょうか。

末筆になりますが本事業関係者の皆様ならびに研究室員諸氏に改めて御礼申し上げます。

サークル紹介

■ 薬学軟式テニス部



薬学部薬学科3年

國本 楽登

Kunimoto Gakuto

私たち薬学軟式テニス部には現在男子19名、女子21名が所属しており、毎週金曜日の放課後と土曜日の週2回活動しています。ソフトテニス経験者だけでなく、大学から始めたという部員も多く所属しており、皆で楽しく活動しております。

主な大会として、夏の関西薬学生ソフトテニス大会、秋の6校リーグがありますが、私の学年が入学してからの2年間は新型コロナウイルスの影響でいずれの大会も中止となってしまいました。今年こそは大会が開催される事を願い、日々の活動に部員一同励んでおります。

一方で、部内のイベントは例年ほど多く開催できておりませんが、昨年より少

しずつ再開しております。昨年の秋には追い出し戦を開催しました。当日はお忙しい中、多くの先輩方にお集まりいただき、現役部員と先輩方でペアを組み試合を行いました。白熱した試合も多くあり、大いに盛り上がりました。また、待ち時間の会話を通して、現役部員と先輩方の交流を深める事が出来、充実した一日になりました。

部長として活動する期間は長くはありませんが、引退まで改めて気を引き締めて精進していきたいと思っております。

最後になりますが、薬学軟式テニス部の活動を支援して下さいの方々、いつもありがとうございます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

薬学部年間行事予定

令和4年7月～令和5年3月

令和4年

8月1日(月)～31日(水)	夏季休業
8月8日(月)	オープンキャンパス
10月3日(月)	後期授業開始
10月22日(土)～23日(日)	蔵本祭
11月2日(水)	開学記念日
12月10日(土)	薬学共用試験 OSCE
12月23日(金)	薬学共用試験 CBT

令和5年

1月14日(土)～15日(日)	大学入学共通テスト
2月25日(土)～26日(日)	一般入試(前期日程)
3月12日(日)	一般入試(後期日程)
3月23日(木)	卒業式・修了式
3月24日(金)～31日(金)	学年末休業

薬学部関連ニュース

教員の異動

令和4年1月1日付昇任 生物有機化学分野 田良島典子 准教授 : 令和4年3月31日付退職 創薬生命工学分野 辻 大輔 助教
 令和4年3月31日付退職 生薬学分野 柏田 良樹 教授 : 令和4年4月1日付昇任 薬品製造化学分野 猪熊 翼 講師
 令和4年3月31日付退職 薬物治療学分野 滝口 祥令 教授 : 令和4年6月1日付昇任 分子創薬化学分野 中尾 允泰 講師

学会賞等受賞

【教員の受賞】

■康楽賞

受賞者: 南川 典昭
 受賞年月日: 令和4年2月8日
 表彰団体名: 公益財団法人康楽会

■日本薬学会賞

受賞者: 大高 章
 受賞年月日: 令和4年3月25日
 表彰団体名: 日本薬学会
 受賞内容: 自然に学ぶペプチド・タンパク質化学の開拓

■2021 Highly Cited Review Award for Biological and Pharmaceutical Bulletin (BPB)

受賞者: 石田 竜弘
 受賞年月日: 令和4年3月25日
 表彰団体名: 日本薬学会

■The Most Published Author Award 2017-2021 in Biological and Pharmaceutical Bulletin (BPB)

受賞者: 石田 竜弘
 受賞年月日: 令和4年3月25日
 表彰団体名: 日本薬学会

■日本薬剤学会 旭化成創剤研究奨励賞

受賞者: 異島 優
 受賞年月日: 令和4年5月27日
 受賞内容: アルブミンの体内動態特性に基づくDDSキャリアの開発に関する研究



【学生の受賞】 (学年は受賞時)

■徳島県における災害発生時の医療体制及び感染症対策に資する移動式施設に関するアイデア

受賞者: PS-TUBE (戒井 綾乃(B1)、西本 惟莉(B1)、原 悠斗(B1)、日高 萌実(B1)、八田 愛梨(B1))
 受賞年月日: 令和3年10月25日
 表彰団体名: 徳島大学バイオイノベーション研究所
 受賞内容: 復旧・復興期(亜急性期、慢性期)における県設置のモバイルファーマシーの機能を補完する移動式施設(MACH-V*)の構築*Mobile Assisting and Controlling Health-vehicle

■第60回日本薬学会中国四国支部学生発表奨励賞

- 受賞者: 日野谷 直人(B4)
 受賞内容: 抗ウイルス活性の獲得を目指した3-テアザプリンヌクレオシド類の合成研究
- 受賞者: 木村 有希(B6)
 受賞内容: Guaianolide型セスキテルペンラクトン類の全合成
- 受賞者: 菅野 正幸(M2)
 受賞内容: ビス8-フェニルメンチルアルキリデンマロネートへの共役付加反応における立体選択性発現機構の解明
- 受賞者: 高橋 朔良(M2)
 受賞内容: 神田茶「茶汁」に関する科学研究(4)
 受賞年月日: 令和4年1月21日

■長井賞

受賞者: 村井 あきほ(B4)、清水 蘭愛(B6)
 受賞年月日: 令和4年3月23日
 表彰団体名: 徳島大学薬学部

■康楽賞

受賞者: 糸賀 美穂(B6)、澤田 侑弥(B6)、菅野 正幸(M2)、堤 大洋(D3)
 受賞年月日: 令和4年3月23日
 表彰団体名: 徳島大学薬学部

■学部長特別表彰

受賞者: 植田 百花(B6)、岡部 芹香(B6)、妹尾 香奈穂(B6)、寺内 勝之(B6)、瀨口 綾花(B6)、西川 明菜(B6)
 受賞年月日: 令和4年3月23日
 表彰団体名: 徳島大学薬学部

■学部長表彰

受賞者: 茅野 公佳(B4)、杉山 司(B4)、武川 和人(B4)、村井 あきほ(B4)、山下 祥花(B4)
 受賞年月日: 令和4年3月23日
 受賞者: PS-TUBE (戒井 綾乃(B1)、西本 惟莉(B1)、原 悠斗(B1)、日高 萌実(B1)、八田 愛梨(B1))
 受賞年月日: 令和4年3月24日
 表彰団体名: 徳島大学薬学部

■徳島大学学生表彰

受賞者: 大岡 功太郎(B4)、山出 莉奈(B4)、木村 有希(B6)、七條 まりあ(B6)、田島 歩未(B6)、橋田 芽依(B6)、光村 豊(M1)、上野 真奈(M2)、中村 天太(M2)、小林 大志朗(D1)、城 裕己(D1)、高田 春風(D2)
 受賞年月日: 令和4年3月23日
 表彰団体名: 徳島大学

■日本薬学会第142回学生優秀発表賞

受賞者: 木村 有希(D1)
 受賞年月日: 令和4年4月22日
 受賞内容: Guaianolide型セスキテルペンラクトン類の全合成

■The 17th International Congress on Neuronal Ceroid Lipofuscinosis NCL Conference Scholarship

受賞者: 城 裕己(D2)
 受賞年月日: 令和4年5月5日
 受賞内容: Contribution of functional interference between CLN6 mutants to the pathogenesis of the neuronal ceroid lipofuscinoses

■日本薬剤学会永井財団大学院学生スカラシップ

受賞者: 山本 舜人(M1)
 受賞年月日: 令和4年5月26日
 受賞内容: 抗原封入PEG修飾リボソームを利用した抗体誘導におけるOVAのアジュバント効果の検証

■日本薬剤学会「薬と健康の週間」懸賞論文 第1席

受賞者: 原 悠斗(B2)
 受賞年月日: 令和4年5月27日
 受賞内容: 東日本大震災から10年、災害医療における今後の展望について一薬学生の立場から

※注釈: 氏名の右横の()内のアルファベットは、
 B=学部生、M=博士前期課程、
 D=博士後期課程・博士課程を指します。

学部等支援基金(薬学部) ご寄附のお願い

薬学部は、職種にかかわらず多様な薬学領域の様々な分野に対応可能な人材「インタラクティブYAKUGAKUJIN」育成を教育理念とし、薬学の新たな未来の創造に貢献するため、教育研究活動を推進しています。このような取組を発展させるため、薬学部・薬科学教育部における教育研究、国際交流及び社会貢献等の様々な活動に基金を活用させていただく予定です。皆さまからの

ご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

- お申込み方法等、詳しくはホームページをご覧ください。



<https://www.tokushima-u.ac.jp/contribution/foundation/>

発行: 徳島大学
 編集: 薬学部広報委員会
 広報委員: 難波康祐、藤野裕道、植野 哲、稲垣 舞、北池秀次

URL: <https://www.tokushima-u.ac.jp/ph/>
 〒770-8505 徳島市庄町1丁目78-1
 徳島大学蔵本事務部薬学部事務課総務係
 E-mail: isysoumu3k@tokushima-u.ac.jp

●皆様のご意見、ご要望、エッセイ、写真、絵画、漫画などご投稿を歓迎します。どしどしご応募くださいますようお願いいたします。次回の発行は、令和4年12月頃を予定しております。